令和6年横審第1号

裁 決

漁船AモーターボートB衝突事件

受 審 人 a

職 名 A船長

操縦免許 小型船舶操縦士

受 審 人 b

職 名 B船長

操縦免許 小型船舶操縦士

本件について、当海難審判所は、理事官熊谷貴樹出席のうえ審理し、次のとおり裁決する。

主 文

受審人 a の小型船舶操縦士の業務を1か月停止する。

受審人 b を戒告する。

理 由

(海難の事実)

1 事件発生の年月日時刻及び場所

令和5年7月5日09時55分少し過ぎ

静岡県御前埼南方沖合

2 船舶の要目

船 種 船 名 漁船A

モーターボートB

総 ト ン 数 7.3 トン
登 録 長 11.96 メートル 7.03 メートル
機 関 の 種 類 ディーゼル機関 ディーゼル機関
出 力 462 キロワット 102 キロワット

3 事実の経過

Aは、平成3年4月に進水し、船体中央部やや船尾寄りに操舵室を設け、同室前部中央に舵輪、その左舷側に自動操舵装置及び機関遠隔操縦装置、下方の棚に左舷側から魚群探知機、船舶自動識別装置（以下「AIS」という。）、GPSプロッター及びレーダー、右舷後方に操縦席をそれぞれ備えた一本釣り漁業に従事するFRP製漁船で、
a 受審人ほか1人が乗り組み、操業の目的で、船首0.4メートル船尾1.7メートルの喫水をもって、令和5年7月4日22時30分静岡県御前崎港を発し、御前崎南方沖合約27海里の漁場に向かった。

a 受審人は、遠州灘を南下し、翌5日01時00分前示漁場に至って操業と移動を繰り返した後、09時30分漁場を発進して帰途に就き、ヘッドアップ表示で3海里レンジ設定としたレーダー及びGPSプロッターをそれぞれ作動させ、操縦席に腰掛けた姿勢で操船に当たり、09時40分少し過ぎ御前崎灯台から201.5度（真方位、以下同じ。）16.34海里の地点で、針路を御前崎東方沖合へ向く034度に定めて自動操舵とし、折からの風潮流によって左方に3度圧流され、機関を回転数毎分1,500にかけ、18.1ノットの速力（対地速力、以下同じ。）で進行した。

a 受審人は、09時52分少し過ぎ御前崎灯台から199度12.77海里の地点に達したとき、正船首1,600メートルのところから、Bを視認することができ、その後、同船がほとんど移動しないことから漂泊中であることが分かり、Bに向首したまま衝突のおそ

れがある態勢で接近する状況であったが、定針したとき船首方を一べつして他船を見掛けなかったことから、前路に航行の支障となる船舶はいないものと思い、見張りを十分に行わなかったため、このことに気付かなかった。

こうして、a 受審人は、B を避けることなく続航中、09 時 55 分少し過ぎ御前埼灯台から 198 度 11.89 海里の地点において、A は、原針路及び原速力のまま、その船首部が B の右舷船首部に前方から 79 度の角度で衝突した。

当時、天候は晴れで風力 2 の南東風が吹き、潮候は下げ潮の中央期にあたり、視界は良好であった。

また、B は、平成 7 年 6 月に進水し、船体中央部に操舵室を設け、同室前部中央やや右舷寄りに舵輪、その前方に左舷側から機関回転計、GPS プロッター及び魚群探知機、右舷側に機関遠隔操縦装置、後方に操縦席をそれぞれ装備した FRP 製モーターボートで、有効な音響信号を行うことができる手段として笛を備え、b 受審人が 1 人で乗り組み、知人 1 人を乗せ、いずれも救命胴衣を着用し、釣りの目的で、船首 0.3 メートル船尾 1.2 メートルの喫水をもって、同日 05 時 30 分御前埼港を発し、御前埼南方沖合約 14 海里の釣り場に向かった。

b 受審人は、遠州灘を南下した後、07 時 00 分前示釣り場に至り、08 時 30 分御前埼灯台から 192.5 度 12.70 海里の地点で、船首部から傘部の直径が 4 メートルのパラシュート型シーアンカー（以下「シーアンカー」という。）を海中に投入し、直径 6 ミリメートル（以下「ミリ」という。）長さ 3 メートルの合成繊維製張り索 10 本に連結した直径 18 ミリの同製引き索、同アンカーの頂部と連結索でつながれた直径 300 ミリの球形黄色ブイに連結した直径 6 ミ

りの合成繊維製引揚げ索それぞれを4メートル及び15メートル延出して船首部及び右舷船首部に備えたクリートに係止し、船首を南東方に向け、機関を中立運転にかけて漂泊を開始し、折からの風潮流により320度の方向に1.0ノットの速力で圧流されながら、知人が右舷船尾部で右舷方を向き、自らは左舷船尾部で左舷方を向き、それぞれ船尾部に設けたエンジンケーシングに腰掛けた姿勢で釣り竿各1本を出して釣りを始めた。

b受審人は、09時52分少し過ぎ御前埼灯台から197.5度11.91海里の地点で、船首が135度を向いていたとき、右舷船首79度1,600メートルのところにAを視認することができ、その後同船が自船に向首したまま衝突のおそれがある態勢で接近する状況であったが、航行中の他船が漂泊中の自船を避けるものと思い、見張りを十分に行わなかったため、この状況に気付かなかった。

こうして、b受審人は、Aに対して避航を促す音響信号を行うことも、更に接近しても衝突を避けるための措置をとることもなく漂泊を続け、09時55分僅か過ぎ右舷船首至近に同船を認めたものの、どうすることもできず、Bは、船首が135度を向いたまま、前示のとおり衝突した。

衝突の結果、Aは、船首部船底外板に擦過傷等を生じたが、後に修理され、Bは、船首部の脱落等を生じ、後に廃船処理された。

(航法の適用)

本件は、御前埼南方沖合において、航行中のAと漂泊中のBとが衝突したものであるが、衝突地点付近の海域には特別法である港則法及び海上交通安全法の適用がないので、一般法である海上衝突予防法が適用される。

海上衝突予防法には、航行中の船舶と漂流中の船舶に適用する定型的航法規定がないことから、同法第38条及び第39条の船員の常務によって律するのが相当である。

(原因及び受審人の行為)

本件衝突は、御前埼南方沖合において、御前埼港に向けて帰航中のAが、見張り不十分で、前路で漂流中のBを避けなかったことによって発生したが、Bが、見張り不十分で、避航を促す音響信号を行わず、衝突を避けるための措置をとらなかったことも一因をなすものである。

a 受審人は、御前埼南方沖合において、御前埼港に向けて帰航する場合、前路の他船を見落とすことのないよう、見張りを十分に行うべき注意義務があった。しかるに、同人は、定針したとき船首方を一べつして他船を見掛けなかったことから、前路に航行の支障となる船舶はいないものと思い、見張りを十分に行わなかった職務上の過失により、前路で漂流中のBに気付かず、同船を避けることなく進行して衝突を招き、A、B両船にそれぞれ損傷を生じさせるに至った。

以上のa受審人の行為に対しては、海難審判法第3条の規定により、同法第4条第1項第2号を適用して同人の小型船舶操縦士の業務を1か月停止する。

b 受審人は、御前埼南方沖合において、釣りをを行うため漂流する場合、接近する他船を見落とすことのないよう、見張りを十分に行うべき注意義務があった。しかるに、同人は、航行中の他船が漂流中の自船を避けるものと思い、見張りを十分に行わなかった職務上の過失により、自船に向首して衝突のおそれがある態勢で接近するAに気付かず、避航を促す音響信号を行わず、衝突を避けるための措置をとることなく漂流を続けて同船との衝突を招き、A、B両船にそれぞれ損傷を生じさせるに至

った。

以上のb受審人の行為に対しては、海難審判法第3条の規定により、同法第4条第1項第3号を適用して同人を戒告する。

よって主文のとおり裁決する。

令和6年7月17日

横浜地方海難審判所

審判官 菅 生 貴 繁